椙山女学園大学教育学部紀要(*Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*) 5:251～260(2012)

特集(Special feature)

中田直宏先生の近況

At the present of Professor Naohiro NAKATA

中田　直宏
Naohiro Nakata

1．はじめに

中田直宏先生にエッセイまたは近況をお願いしたところ、「転居と切迫した仕事に忙殺されて、お申し入れの期日に間に合いそうもなく、恐縮ですが、もしよろしければこの記事を近況の一端として掲載下されば幸いです。多くの大学に関係してきた私の最後で最愛となった椙山のことも載っていますので」との返事をいただきました。そこで、編集担当、野崎健太郎の責で掲載いたします。記事は“なごや文化情報（名古屋市文化振興事業団）”8月号（p.6-7）および9月号（p.6-7）に掲載された「この人と・・・(聞き手：小沢優子氏)」です。

2．マンドリンとピアノを学ぶ

中田さんは1939（昭和14）年、名古屋市に生まれた。幼い頃から音楽が好きで、年の離れた姉が通うギターや箏のお稽古に一緒に付いていき、長時間の箏の発表会でもずっと聴き入っていた。小学校に入ると、ギターは小さな子どもには無理だったので代わりにマンドリンを与えられ、姉とともにギター・マンドリン界の重鎮で作曲家の中野二郎先生の門下生になった。実はあまり気の乗らながったマンドリンだったが、ＮＨＫ名古屋放送局の番組にも何回か出演し演奏している。やがて中野先生にピアノをすすめられ、ピアニストであったご子息の雅之氏に教えてもらうことになった。

中学は南山中学。実力試験ではいつもトップクラスだったのが、3年生のある時300人中27番に下がり、親が呼び出されてしまった。ところが母親は、「なぜ怒られるのでしょうか、27番ならほめてやりたいです」と中学側の叱責には動じず、その頃知り合いの声楽家から聞いた菊里高校音楽科へ進むようにと言ってくれた。母親の後押しを受けて、腕試しに菊里高校をピアノで受験。合格した。

3．菊里高校から芸大作曲科へ

高校に入学し、東京藝術大学（芸大）の伊達純先生のもとに月1回のピアノのレッスンに通ったが、芸大のピアノ科は無理かもしれないということで、菊里の先生からは他の科で芸大を目指してほしいと期待をかけられた。声楽科はどうか、楽理科はどうか、作曲科はどうか…。芸大受験生のための巡回指導で菊里を訪れていた音楽学者の服部幸三先生がらは、「楽理科を志望してほしい」と言われ気持ちは動いたが、授業用に我流で女声合唱曲を書いており、作曲の世界にはすでに足を踏み入れていた。そこで、服部先生から『作曲法教程』などの著書でも有名な、作曲家の長谷川良夫先生を紹介していただき、能力や適性のテストを受けることになった。音感もピアノも大丈夫だと認められ、自作の合唱曲も気に入って下さった。おそるおそるきいてみた。「見込みはあるでしょうか？だめなら言ってほしいのですが…できるなら浪人はしたくありません」。すると突然、長谷川先生は大声で怒りだした。「作曲は一生の仕事だ！何と甘い考えなんだ、浪人がいやだなんてとんでもない！…君は作曲をやるんだ!!」。道は決まった。

1958（昭和33）年に芸大作曲科に入学し、4年後に卒業。卒業作品の≪ヴァイオリン・ソナタ≫は高く評価され、黛敏郎氏の作品に続き、「日本の現代作品シリーズ」として音楽之友社から楽譜が出版されている。

「中学で成績が落ちて母親が呼び出されなかったらおそらく音楽の道には進まなかっただろうし、服部先生がいらっしやらなかったら長谷川先生との出会いはなく、作曲家にはならなかったでしょうね」と、中田さんはいくつかの転機を振り返る。

4．大学で教える

芸大を卒業してすぐ、3年間の約束で福岡教育大学で作曲とピアノを教えることになった。大学の授業のほか、ＮＨＫ福岡放送管弦楽団のピアニストとして仕事をし、リサイタルをおこなうなど、しばらくはピアノに専念する日々が続いた。3年がたち、当時自宅のあった東京にはすぐに大学のポストはなく、ちょうど設立されたばかりの愛知県立芸術大学の教官になった。指導した学生たちの中からはすぐれた作曲家が育っている。日本音楽コンクールの作曲部門で２位に入賞した平光保氏は1期生、エリザベート王妃国際音楽コンクールの作曲部門で日本人で初めてグランプリを獲得した藤掛廣幸氏、名古屋芸術大学の音楽学部長となっている堀田秀雄氏はともに2期生で、中田さんの教え子である。

5．留学、ジョリヴェに感銘

1968（昭和43）年からの1年間は、愛知県在外研究員としてドイツのミュンヘン音

楽大学に留学している。忘れられないのは、最後の3ケ月に訪れたバイロイトとパリでの体験である。

バイロイトではワーグナーのオペラを上演する祝祭劇場のオーケストラ・ボックスに入りたいと思い、人を介して劇場支配人に頼んだ。希望はかない、まだ30代だった指揮者のロリン・マゼールの許可を得て第1ヴァイオリンの横に椅子と譜面台を置きワーグナーの大作≪ニーベルングの指輪≫の4日間の上演を経験した。マゼールはほとんど暗譜で指揮していたという。同行していた先輩の若杉弘氏には「ステージを見ないなんてもったいない」と言われたが、「オペラの暗譜でもやればできるんだな」と深く感じ入った。

パリのコンサルヴァトワールでは、20世紀のフランスを代表する作曲家アンドレ・ジヨリヴェに師事。個人レッスンと、10人ぐらいの受講生を対象とした講義を受けている。ジョリヴェの才能、民族音楽や楽器など広範囲に渡る知識には心から敬服し、今でも中野二郎先生、長谷川良夫先生とともにジヨリヴェの名前を自分の師として掲げている。ジョリヴェは後に来日。名古屋にも招くことができ、愛知県立芸術大学で特別講演をお願いした。その折、名古屋城を見たいというので案内すると、日本の歴史について詳しく質問。こちらがたじろぐほどの博識ぶりだったという。

ちなみに、ジョリヴェには長谷川良夫先生も並々ならぬ関心と好奇心を寄せられた。中田さんが留学中に≪オーケストラのための4章≫（外山雄三氏指揮の東京交響楽団によって初演）を書き上げてすぐジヨリヴェに見せたところ、「ここがなかなか良い…、ここの管楽器の使い方も良い…」と作品を批評してくれた。その時のことを長谷川先生は知りたがり、「ジヨリヴェはそこで何と言った、どう言った」と熱心にたずねられたのも感慨深い思い出である。

6．愛知教育大学へ

愛知県立芸術大学に15年ほど勤めた後は、愛知教育大学へ移る。大学院が設置されることになり、作曲だけでなくピアノや指揮の指導もできる中田さんが必要とされたのである。定年まで勤め、退官後は教育学部が新設された椙山女学園大学に客員教授として招かれ、今年の春までその職にあった。50年近くに渡る大学の教員生活。その間、中田さんは指揮、作曲と幅広い活動をおこない、その活躍の地はロシアにも及んでいる。

7．オーケストラを指揮

作曲とともにオーケストラの指揮もまた中田さんの重要な活動である。名古屋放送管弦楽団の演奏会や、名古屋フィルハーモニー交響楽団の岡崎や刈谷などでの特別演奏会、学校を訪問する巡回演奏会をたびたび振るほか、名古屋二期会とも早くから関

わりを持ち、1980（昭和55）年の自作オペラ≪玉手箱かぐやひめ物語≫を始め、≪マルタ≫≪ヘンゼルとグレーテル≫≪修道女アンジェリカ≫等を指揮している。「オペラの暗譜は半年かかりますが、それに比べれば交響曲や協奏曲は楽ですね」とおっしゃるように、バイロイトでロリン・マゼールに刺激されて以来、オペラの指揮も暗譜でおこなっている。

8．ロシア、クラスノダールで

ロシアのクラスノダール市は、黒海近くの人口70万の都市。中田さんは1993（平成5）年にここでおこなわれた国際フェスティヴァルの音楽祭に特別招聘の外国人作曲家として招かれている。前年、音楽祭に日本人作曲家が呼ばれることになったので関係者から打診を受け、大学の卒業作品で楽譜が出版されている≪ヴァイオリン・ソナタ≫などが決め手となり、招聘に至ったのだ。

ロシアでは、まずモスクワで記者会見と、全ロシア作曲家同盟の幹部との会合。初代シヨスタコーヴィチから数えて3代目の委員長である作曲家のカゼーニン氏も同席し、日本の作曲家の現状などいろいろなことを質問された。日本では、署名な作曲家でも生活するのに十分な委嘱があるわけではなく他に収入を求めなければならない、と説明すると不思議そうな顔をされた。ロシアのエリート級の作曲家は公務員で、高級車・運転手・秘書付きの好待遇。ロシアでこうなのだから、豊っかな日本ではもっと恵まれているだろうと思われたのだが、それほど当時のロシアでは日本のことが知られていなかったようである。

クラスノダールの音楽祭では中田さんのほぼすべての曲が演奏された。国立ロストフ交響楽団を指揮して自作を演奏することもあり、指揮者としての力量も示した。それらは好評を博し、とくに、1983（昭和58）年に安城合唱団によって初演された伊東静雄の詩による合唱曲≪わがひとに与ふる哀歌≫は「スラヴ民族の魂にふれる名曲」と賞賛されている。音楽祭の模様は国営放送で全ロシアに放映。翌年、クラスノダール市芸術賞を授賞された。

滞在中、「ヴァイオリンのレッスンを受けたい」と言われ固辞したが、少女が地方からバスで10時間かけて来たと知り、断れなくなった。少女は確かなテクニツクでチャイコフスキーの協奏曲を弾いたが、チャイコフスキーの国で日本人の自分がアドヴァイスしていることを感慨深く思ったことも忘れられない。

≪なよ竹の輝夜≫

中田さんとオペラとのご縁は深く、すでに菊里高校時代に先生の脚本をもとに≪浜木綿（はまゆう）≫というオペラを作曲している。清く正しく生きた花魁の一生を描いたこの作品は学校の定期演奏会で上演され、新聞やラジオでも取り上げられて注目を集めている。作曲家となりさまざまな曲を手がけていく中で、1980（昭和55）年には名古屋二期会創立10周年記念のためのオペラ≪玉手箱かぐやひめ物語≫を作曲。その後、名古

屋二期会のオペラ公演の指揮や総監督を務め、2003（平成15）年からは同会の会長（現在、同顧問）。2005（平成17）年には、≪玉手箱かぐやひめ物語≫を大幅に改訂した≪なよ竹の輝夜≫が「愛・地球博」のパートナーシップ事業の一環として上演されている。

≪なよ竹の輝夜≫は竹取物語を主な題材とした日本もののオペラだが、「まず全体の響きをつくり、そこに歌を織り込むことが多かったですね」という中田さんの言葉どおり、オーケストラの密度の濃い響きが基調となっている。だから、日本的な旋律を含みながらも常にたっぷりとした流れが織りなされ、物語はドラマティックに起伏豊かに運ばれている。西川右近氏の演出、朝倉摂氏の美術による舞台と音楽は一体化。≪なよ竹の輝夜≫は新聞や雑誌でも高い評価を受け、佐川吉男音楽賞奨励賞を受賞している。

9．創作について

作曲の筆が進むのはたいてい夜であるが、その日用事のために少しでも外出をしていると作業はなぜかはかどらない。考え悩む時間があるにせよ、1日すべてを費やさないと調子が出ないのだ。また、深夜3、4時頃ひとまず途中で切り上げ、翌日になって書きかけの楽譜を見ると、全く気分がつながらず破棄したくなることがよくあるという。「インスピレーションは起こりますが、それを音にして楽譜を書いていくのはかなり時間がかかります。どんなに短い曲でも一気呵成ということはありません。何日もかかります。その間、持続力や集中力が保たれるといいですね…」、「好調な時はうれしくて自信を持てますが、作曲ができなくなったのではないかと思うくらい書けないこともあります。そのくり返しです」と、創作の難しさについて語ってくださった。

10. 最近の日々、諫早の演奏会

今年の春に椙山女学園大学を退官され、溜まる一方であった好きなジャズのレコードを聴くことができるようになったのが一番の楽しみであるが、音楽活動が止むことはない。5月7日には九州の諫早市の諫早文化会館で九州交響楽団の奏者がら結成された九州室内合奏団を指揮。モーツアルトやグリーグのピアノ協奏曲、サン＝サーンスの≪動物の謝肉祭≫のほか、立原道造の詩による1983（昭和58）年初演の合唱曲≪夢のあと≫とクラスノダールで絶賛された≪わがひとに与ふる哀歌≫を演奏している。ビデオを拝見させていただいたが、オーケストラと地元の合唱団を明快、知的にまとめる指揮であった。

この日の演奏会には福岡教育大学での最初の教え子や椙山女学園大学の最後の教え子たちが集まり、打ち上げのパーティーでは皆で一緒に写真におさまった。教え子たちの年齢差は約50歳。中田さんの長い教員生活を象徴するような1枚である。

大学の勤めが一段落したので、以前がら頼まれていた作品に本腰をいれて取り組むつもりである。「これから、本当の意味で作曲家になれるのかな…」。今年中に3、4曲は仕上げたいと思っている。（了）